

指摘している。

以上のことから、私自身は、身体運動についての科学的知識をふまえ、社会体育、生涯体育として有効に実践しうる意識を高めさせる授業を心がけたい。もちろん、運動の場を学生間の交流、お互いに汗を流して味わえるふれあいの場にも通ずる授業と

したい。つまり、授業の中では、常に厳しさと楽しさを味あわせたい。

体育授業に対する所信を述べてきたが、最後に一言、「学生と共に汗を流したい!!」これが、私の初心である。この気持ちをいつまでも忘れずにいたいと思う。

## 高松に赴任して

古来、洋の東西を問わず、「歲月、人を待たず」と言われるように、ここ高松に赴任して3カ月、早いものである。

人生の最も多感な青年期である歳月を、社会的にも、又、年齢構成的にも、一般社会と隔絶された環境にあった大学で過ごした私にとっては、社会復帰（少々、大袈裟であろうが）するの、又、大へんな労力を要した3カ月であった。別の視点からすれば、今までの学生としての受動的な状況にあった環境からの180度の転換でもあった。

さて、私の研究分野であるが、体育原理と呼ばれるものである。体育原理といっても、一般の人には奇異な名称として、一体それが何を意味するのか、又、一体何を対象として、どのような方法をもってするのか疑問に思われるだろう。体育に関する学は、特に、スポーツに関する科学（スポーツ科学=Sport-wissenschaft）は「スポーツは学問ではない」といった主張により、長い間“Academic Taboo”として認識され、積極的に研究されずに来たという事実

## 友 添 秀 則

があり、又、スポーツが我々に提示する現象の複雑性と多様性が、それに一層の拍車をかけ、他の諸学に比して立ち遅れているという現状である。これらの背景からも理解されるように、体育原理が何を対象とし、又、どのような方法をもって1つの学（discipline）たり得るのかに対する明確な統一的見解は見当らない。ただ、それは、我々の了解事項として、今のところ、身体論（心身相関論、最近では現象学的視座に立った研究が主流である。）、認識論、教科教育論（授業研究並びに体育教材論をも含めた範囲での）が対象として考えられ、それを主に哲学的、あるいは人文諸科学の方法を用いて、スポーツを含めた広範な体育事象を考察していくものであると考えられている。

昔から、よく「一つのスポーツを深く経験した者には人格者が多い」という言葉を耳にする。私が過去、長い間、行なってきた柔道では、同じ意味を含む言葉として「達人」というものがある。これらの意味するものは、確かにスポーツが陶冶性を内

包することの1つの根拠になるであろうし、又、それ故に、スポーツが学校体育の教材として教育というカテゴリーの中に存在して来た1つの根拠とも考えられる。しかし、昨今のスポーツの多様化はただ単に、スポーツによる陶冶を過去、行なわれてきたように、経験的に又、希望的推測のもとに論じることを許さない状況を現出させて来たのである。以上の事柄を踏まえた

上で、スポーツで養われた倫理的特性とも言うべきものが、果たして、いかにすれば日常生活に転移可能となるのかということが現在の最大関心事であり、又同時に、研究のテーマでもある。

まだまだ、その端緒についたばかりである。一層の努力をと肝に銘ずるばかりである。

## 物理学講義雑感

中 西 俊 介

この4月に教壇に立って講義をする身になってから3ヶ月になります。それまでは専ら講義を受ける側であったので、講義をする要領についてはまだまだ掴みきれません。農学部一回生向けの物理学を担当しているのですが、最近、講義の内容が進むにつれて啞然としている学生が目につくようになって来ました。どうも数学的な取扱いの複雑さに面喰い、戸惑っている様子なのです。やっている範囲が物体の運動を扱う力学なので、問題にしている運動がどんな運動で、どういう力が働いた場合の運動であるかをイメージとして理解する事は、具体的な事例については比較的容易であろうと考えられます。しかし、一般的な原理を導き出すとか、その一般原理を用いて具体的な運動を扱うという場合には微積分やベクトルなどの数学的取扱いがどっさり出てくるため、それらに圧倒されてしまって、物体の運動のイメージと数式の対応がつかなくなり、啞然としてしまうようです。こ

ういう事は私も教養の頃に経験があります。物理の講義を聞いていると、内容がどんどん数学的になってきて数学の話だけで時間が終わる事もあるのです。そこで出てくる数学は生半可な事では分らない場合も多く、理解するのは後回しにしてとに角ノートだけ採る事になる訳です。後でそのノートを見てみるのだけれど、沢山並んでいる数式がいったいどういう問題を扱っている時に出てきたかが分らない、または問題にしている現象のどういう事柄を表わしているかが分らなくなっているのです。それは現象の理解のための手段に過ぎないはずの数学にあまりに目を奪われたためであったのでしょうか。この様な数学と現象の間の違和感は、簡単で具体的な問題を扱っている分にはまだ少ないのですが、一般化、抽象化された問題を扱う段になるとなかなか拭い切れず、ついには「なんでこんな複雑な数学を使わないかんのか。」という愚痴をこぼすことにもなるのです。また、物理